

猫蓑通信

第 129号

令和8年
(2026年)
2月28日発行
(年3回発行)

連句実作と見込み・趣向・句作り 鈴木千恵子

昨年の五月、第二回関西連句を楽しむ会で、式目の話をさせていただいた。その場で参加者への「式目・作法についてのアンケート」が行われた。項目は「I全体を通じて」と、「II作法」に分かれていた。回答は選択式だった。例えばIの中の「去嫌」では、①厳守すべき②変化をつけるためにあつたほうがよい③こだわらない④無用であるのうち該当するものに、IIの中の「発句」では、①切れ字を必ず入れる②切れ字は入れなくてもよいのうち該当するものに、○をつけるという形式だった。所属グループのルールではなく、個人の意見で答えてくださいという注記があつた。それでも、わたしは猫蓑会の式目に沿って答えていくこととなった。すると「くするべき」「必ずく」を選択することはほとんどなかった。猫蓑会は式目に厳しい(うるさい?)、と世間で言われているようにも感じるが、わりと柔軟な作品作りをしているのではないかと再認識した。「II作法」には、「同字の使用」に関する問いもあつた。そこで「全巻を

通して避ける」を選択した回答が23人中10名もあつたことには驚かされた。個人の意見とはいえ、所属グループの考え方の影響や、現代詩を背景に連句をされている方の美意識もあるうか。旧派の俳諧の伝統を継承していると自覚するわたしは三句去りである。恋句について「一巻に二箇所」を選択した回答が15名であつたのも同様。恋は一箇所のこともあるし、三句去りなので、歌仙などでは三箇所もありうると考えている。アンケート結果は、連衆の連句に対する向き合い方が浮き彫りになり、非常に新鮮だった。

翌日は、西鶴の墓所の誓願寺や生玉万句の興行された生玉神社を案内していただいた。また隣接する夕陽丘の地名が、藤原家隆の終の住処の夕陽庵によると知らなかつたわたしは、家隆塚(伝藤原家隆墓)にも詣で、かつて大坂湾に落ちた夕陽に思いを馳せた。

その会
の話で、
連句の付
合を「見
込み・趣
向・句作
り」とい



生玉神社の井原西鶴像。西鶴は延宝八年(1680)5月7日暮六つから翌日の暮六つまで、この地で四千句を独吟

●目次●

- ▼連句実作と見込み・趣向・句作り 鈴木千恵子 1
- ◎第百七十三回例会(芭蕉忌・明雅忌) 作品六巻 4
- ◎芭蕉忌正式俳諧 6
- ◎蘆丈新出資料について【続報】 根津 忠史 8
- ◎第40回国民文化祭連句の祭典入賞作品四巻 10
- 国民文化祭実行委員会会長賞「ゆゆゆ」 瀧村小奈生 捌
- 五島市長賞「彼岸西風」 高塚 霞 捌
- ジュニアの部長崎県教育長賞「噴水」 五郎丸照子 捌
- 同 五島市長賞「サンタ」 五郎丸照子 捌
- 事務局だより 12

う概念で分析する方法についても触れた。今回はそのことについて、再度詳しく述べたいと思う。

俳諧研究者の佐藤勝明氏は、芭蕉の付合に関して、①作者は前句に対してどのような理解を示し、とくにどの点に着目したか(見込)、②作者はその見込に基づき、どのような場面・情景・人物像などを描こうと考えたか(趣向)、③作者はその趣向を具体的なものとするため、どのような素材・表現を選んで一句にまとめたか(句作)の三段階によって分析をされている。

令和二年に上梓した『杞憂に終わる連句入門』に、玉城司氏と佐藤勝明氏との文音歌仙を掲載し、見込み・趣向・句作りについて解説を付した。玉城司(珠十)氏は、蕪村研究者でもいらつしやるので、蕪村の「老が恋わすれんとすればしぐれかな」の句の脇起りとした。この分析方法を利用して、自分たちの実作の付けを論理化しよ

うという試みであった。以下、その表六句を形式を整えて、再掲する。

1 老が恋わすれんとすればしぐれかな 蕪村

2 ちりちり痛む胸の埋火 千恵子

①発句にはわすれようとしても諦められない
恋心が詠まれている。

②その未練を、埋火に喩えた。

③恋心を「ちりちり痛む」と表現した。

3 迷ひ犬人混み分けてさがすらん 珠ト

①脇は恋に身を焦す人物の胸のうちが詠まれている。

②恋の焦燥感を迷子になった犬をさがす愛犬家の心情に転じた。

③必死の様子を「人混み分けて」と表現した。

4 ニユースを流す壁のあちこち 勝明

①前句を都会の雑踏と見て、

②その中で目にしそうな光景を想像し、

③電光掲示板に情報が流れるとした。

5 蔦かづら蔓の先には細き月 千

①前句のニユースの流れる壁に注目して、

②壁といえは蔦かづらが這っているものと連想し、

③蔓がのびている先に、細い月が出ているとした。

6 新酒につける洋風の銘

①前句の古風の月の出方に注目して、

②一方で新しい酒を持ち出した。

③酒造家の若旦那などをイメージしている。

現在、連句の実作の座では必ずしも、前句をどのように見込み、どのように趣向を立てて……ということを意識してはいない。もともと本能的なものとそれまでの経験によって、付句が「降ってくる」または「湧いてくる」という印象である。が、その感覚的な付けがどうして生じたのかを、少しでも論理化したいという気持ちだった。「老が恋」（脇起り）歌仙は膝送りの文音で、次の付け順の者が前句を治定した。句が治定された時点で、見込み・趣向・句作りを自注した。そして満尾の後に、自分たちの実作を振り返って、意見を交し合ったのである。

では、芭蕉の作品ではどのように付合は分析できるのだろうか。佐藤勝明氏の最新の論文は『猿蓑』「市中は」歌仙分析（『和洋国文研究』令和七年三月）である。氏は、芭蕉流の付合の変遷に関心を持ち、「芭蕉流の付合手法がほぼ完成の域に達するのは元禄三・四年のころ」ではないかという見通しから分析をされている。

先に述べたように、おそらく芭蕉とその門人も、前句をどのように見込み・趣向を立てて……ということをつつ順序だてて行ったわけではなく、見込むと同時に趣向が浮かんだり、趣向を立てようとしたときにすでに素材や表現

が選び取られていたこともあるだろう。三つが混然としているのも、付けというものだろう。が見込み・趣向・句作りという分析が、付筋を理解するために有効な方法であることはよく実感できる。

このような論は、佐藤勝明氏も言及されているが古くは、山下一海氏の「見入れ・趣向・句作り」に見ることができ。また、論文を繙かなくとも手近な注釈書で、それを認識することもできる。紹介したのは、岩波書店の日本古典文学大系『芭蕉句集』である。岩波書店からは新日本古典大系『芭蕉七部集』も出版されている。七部集として俳諧を取り上げた意欲的な一冊で、全句に細やかな注が示されているが、今回取り上げるのは『芭蕉句集』。古典研究者（や古典愛好者）は「旧大系」と呼びならわしている。緑ではなく赤の表紙の方。注は中村俊定氏である。『猿蓑』の「夏の月」の巻と題されている表六句を挙げる。

注は「見込み（見入れ）・趣向・句作り」というかたちに統一はされていない。が、「月を仰ぎ涼味を追う人々ありと見て」「農家の人々と見て」「稲の早穂を趣向した」「山間僻地のさまと見て」「田舎まわりの都人士のことばと見て」（傍点筆者）などという言葉が散見する。「見込み・趣向」に触れている箇所を、引用してまとめてみる。

1 市中は物のにほひや夏の月 凡兆

2 あつしくと門くの声 芭蕉

① 発句の中に、暑さに堪えないで屋外に出て、月を仰ぎ涼味を追う人々ありと見て、
② 夕涼みの情景を人々の声で表わした。

3 二番草取りも果さず穂に出て 去来

① 前句の暑し暑しという声を農家の人々と見て、
② 稲の早穂を趣向した。

4 灰うちたゝくうるめ一枚 兆

① 百姓の忙しい余情
② 農繁期の昼餉のさま。

5 此筋は銀も見しらず不自由さよ 蕉

① 前句に粗食にあまんずるわびしい生活が感ぜられる。付句はそれを山間僻地のさまと見、
② 他からこれをながめている旅行者のことはであらわした。

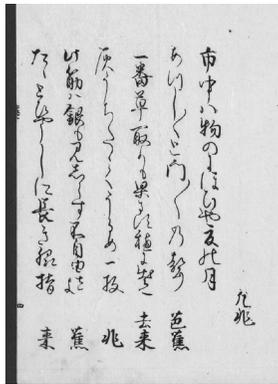
6 たゞとひやうしに長き脇指 来

① 前句に片田舎を嘲笑した語気がある。それを田舎まわりの都人士のことはと見て、
② 博徒の類か町奴風の人物を連想し、
③ その男の風体でその人柄をあらわした。

表六句に「句作り」の語はない。が、8「行燈ゆりけす」と句作した。9まだ花も蕾であったのにと句作した。16それを寺に帰る僧としたのが句作。31品変りたる恋と句作したのである

う。33粥をめぐみ施すと句作したのである、などとその語が見出せる(数字は歌仙の通し番号のもの)。したがって、全体に「見込み(見入れ)・趣向・句作り」を意識した注となっていることがわかる。

わたしは、芭蕉の連句作品の注釈を読むときに「見込み(見入れ)・趣向・句作り」に注目することによって、その付筋が論理的に理解できるように思う。そして皆さんも、一度くらいは自分たちの実作を振り返って、自注してみてもよいのではないだろうか。



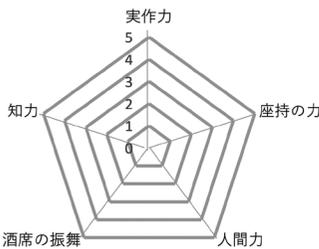
早稲田大学図書館所蔵『猿蓑集』
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko31/bunko31_a0382/index.html

以上は、日頃感覚的に行っている付けとものを論理的に「見える化」する試みであった。では、連句に向き合うときにわたしたちほとんどな力をつければよいのだろうか、という連句力の「見える化」を考えた旧稿がある。「俳諧師の条件」(日本連句協会会報)令和三年十二月)である。令和三年は、前年からのコロナ渦の影響で、実作会も会報の掲載作品数も減少し、原稿が不足していた時期である。実作会の減少によって、連句について考える時間は増えていたように思う。また、猫蓑会ではその年の八月に

前会長の青木秀樹さんが入院され、今後自分は連句にどう向き合っていけばいいのかということとを考えざるを得ない時期でもあった。

「俳諧師の条件」で、必要と考えた力は五つである。まず一に実作力。連衆として捌きとして、どういう力が必要なのかはさらに追求する必要があるだろう。二は座持の力とした。会長に就任し、猫蓑庵を襲号し、連衆をもてなすことの重要性も痛感している。三を知力とした。第一に挙げた実作力は、座持の力と知力で左右から支えられているというイメージである。四を人間力とした。人間力は、座持の力に隣接しているのだが、座持の力の根本となっている。そして、五が酒席の振舞。わたしは相変わらず、体質的にアルコールがいただけない。しかし、最近では、当時より酒席の機会が戻ってきたのを嬉しく思う。旧稿を振り返ってみて、なんだか求道的な雰囲気になってしまったが、最後に「俳諧師の羅針盤」というリーダーチャートを見せておくので、皆さんも自己診断して遊んでみましょう、という趣旨である。

俳諧師の羅針盤



秋の座

源心「小名木川」 野口 明子 捌

時雨忌や水脈のふくらむ小名木川 明子
乱れ舞ふなり都鳥群れ 孝子
本棚の文学全集繙きて 有子
学生気分カップ大きめ 一修
ウ まだ山に暑さの残る秋の月 惠美子
火照る肌身に風の爽やか 修
御会式の後この宿に買ひし恋 孝
前の晩から仕込む豆腐屋 同
またしても米露交渉難航し 修
報道各社明日を憂ふる 美
車にはもしかの為の工具置く 有
芝の浜にて拾ふ大金 同
羽織脱ぐ人間国宝花の宵 孝
歩みふらりと行く日のどけし 修
ナオ 気まぐれに仔猫を貰ふバスケット 孝
ダンクシュートに揺れるアリーナ 修
あこがれのひとの写真を下敷に 有
家事全般に頼もしき夫 孝
訳有りと影の重なる夜鳴蕎麦 明
捜査一課のかぎまはる路地 孝
わるがきの頃見た夢を笑ひあひ 孝
毛脛にびしやと叩く藪つ蚊 孝
流れゆく雲に月あり夕涼み 修

新内節に二階から声 美
ナウ常連とパーティーけふは無礼講 有
プリマドンナは美しく老い 修
哲学の道に降りしく花大樹 有
乳母車押すうらかな午後 美

連衆 坂本孝子 佐々木有子 木野一修

関口惠美子

尾花の座

源心「風狂を」 佐藤 徹心 捌

風狂を遊び尽さむ桃青忌 徹心
零るるばかり実る万両 千恵子
教室に作曲家の絵貼出して 忠史
右側通行走るべからず 坊太
ウ 月上り皆道急ぐ太鼓橋 荷夕
籠から覗く猿の腰掛 心
どぶろくに濡れる唇ぼつてりと 千
良縁願ひ二礼四拍手 史
湖に貝取る舟の浮かびをり 太
エスニック料理効かすシナモン 夕
百均の老眼鏡でよく見える 心
看板猫はけふもお昼寝 千
花を愛で数多の人の通り抜け 史
茶摘みの唄をうたふ母と子 太
ナオ 春の富士借景にしてお弁当 夕
かぶく心の元は縄文 心
未確認飛行物体来襲す 千
どうした訳かくしやみ止まらず 史

女子会で品定めする雨の夜 太
君かはいいね今やセクハラ 夕
真実の口に何でも打ち明けて 心
栄華の跡に生える夏草 千
涼しげに月渡り行く大空を 太
予定いつぱい旅の計画 史
ナウ 酔ひ止めは錠剤ふたつ水なしで 夕
全てフォークでランチ気楽に 心
幸せな人の夢買ふ花の中 千
目借る蛙に大欠伸する 史

連衆 鈴木千恵子 根津忠史 山本坊太

西田荷夕

葛花の座

源心「冬紅葉」 武井 雅子 捌

冬紅葉翁も聞きし川の音 雅子
庵の炬辺にかきよせる炭 転石
ビル街の都市伝説を小説に 桜千子
人気なき路地猫が集まり 万迷
ウ 月煌々舞踏会へと急ぐ御者 遊子
南瓜切りつつ夫婦別姓 桜
きつきつの指輪秋思の薬指 遊
風呂の鏡のウロコしぶとい 同
どこまでも紺碧の海続く旅 雅
お得料金飛びついてみて 石
レイトショー観たい映画の時間待ち 迷
総理の椅子は幻となり 桜
地元から銘菓の箱と花便り 遊

第七十三回猫蓑会例会
芭蕉忌・明雅忌 源心六巻 6

桔梗の座

源心「ジョン・レノン聞く」 柵町 未悠 捌

時雨忌やジョン・レノン聞くひとり旅 未悠

車窓はるかに低き寒月 香織

書道展子らの作品並びびめて 霞

公民館の匂ひ独特 拓也

ウ 牛蒡などレシビ新たに組み込まん 鄭和

九十九里浜海霧を突つ切る 同

二人して呑んで吞まれて熱帯夜 拓

小指からめるガジュマルの下 霞

くたびれた靴のかかとを踏んだまま 織

特攻隊を送る制帽 拓

マラーの「大地の歌」を合唱し 悠

水平線に波のきらめく 織

故郷の氏神の花燦々と 霞

七曲りゆく囀の中 同

ナオ 伯爵はのどけき庭に佇みて 和

夢から覚めてポロいアパート 拓

銭湯をリノベーションした喫茶店 織

あちらこちらに熊の出没 同

着ぶくれの人満載の山手線 和

何と言つてもぼつちやりが好き 織

新妻の犯罪暴く名探偵 同

鳥兜には特別な味 和

月満ちて膳には丸いものばかり 拓

秋の遍路に逆打ちで行く
ナウ 寝そべつてスマホ操作の小半日

ベテラン司書の選ぶ新刊

花の宴上野の森は盛り上り

家族の留守を守る蜜蜂

連衆 平林香織 高塚 霞 藤澤拓也

高山鄭和

織 霞 織 悠 拓



正式俳諧の際、毎回置かれる東明雅先生の写真の前に、刊行されたばかりの『新装版連句入門』を供えた。興行の翌日10月20日は先生の御命日だった。

第七十三回猫蓑会例会
芭蕉忌・明雅忌 正式俳諧

令和七年芭蕉忌俳諧連歌二十韻

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る 翁

冬の紅葉の杖慕ふ頃 孝子

水の音即かず離れず続きあて 了斎

方位磁石の青針が北 遊眠

ウ 採り立ての蔬菜を柵に月祀る 忠史

べつたら市へ薄化粧せむ 英雄

うそ寒に寄り添ひふつと盗む唇 雅子

恋には初心なルパン三世 葵

張り込みへいつもバゲット赤ワイン 正夫

夜明けの鐘にふいに起こされ 肇

ナオ 天地の果へと我を誘ふか 良子

嬰の欠伸に笑みのこぼれる あき子

ペンションは窓いつばいにブナ林 香織

媚薬を作る魔女を探して 秀夫

夏衣はらりと肩をすべる月 転石

驟雨激しく戻れない恋 純子

ナウ 世田谷は一方通行狭き道 洋子

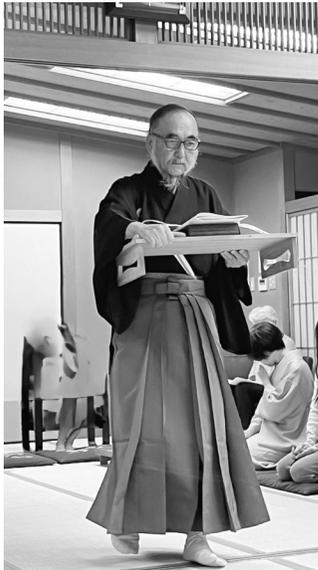
春泥跳ねた僕の自転車 をんみ

口を衝くラップに合はせ花の降る 千恵子

岬の丘に憩ふ若駒 執筆

芭蕉忌正式俳諧
令和七年秋 配役

宗匠	鈴木千恵子
脇宗匠	根津 忠史
副宗匠	武井 雅子
執筆	高山 鄭和
知司	近藤 純子
座見	田中 秀夫
座配	大島 洋子
花司	鶴飼桜千子
香元	平林 香織
配硯	篠塚 雅世
同	福澤をんみ
所作指導	武井 雅子
奏 楽	佐々木有子
写真撮影	田中 秀夫
着付	岩崎あき子



執筆が懐紙・水引・硯箱等に乗せた文台を持って席入り



正式俳諧を無事に終えてお役一同の記念撮影



文台捌きを終え、歌膝で付句を待つ執筆



重ね硯を持って配硯が宗匠・脇宗匠・副宗匠らの前に硯を置く。



座配の案内で宗匠の席入り



2階の和室で正式俳諧を終え、1階に移動して連句実作



付句が出され、障りがないかどうか宗匠・脇宗匠・副宗匠が確認

根津蘆丈新出資料について【続報】 根津忠史

猫蓑事務局から連絡を受け、早速先方にコンタクトしました。

長野県下伊那郡高森町の下村さんが屏風と封筒を発見してから、懸命に関係のありそうな方々を尋ねて（当初は「適丈」か「適支」と判読していたらしいです）、ついに「蘆丈」と判明して、猫蓑会のホームページに辿り着いたとのことでした。

すぐにでも頂きたいとお話しましたが、農園を営んでおり今は繁忙期とのことでしたので、しばらく保管しておいていただきご都合のいい時にお邪魔して受け取らせてもらうことにしました。ところがその三日後に下村さんから、急に伊那に行く用事が出来たから届けて下さるとの電話があり、芋庵まで運び込んでいただきました。芋庵の庵主は東京におり不在の為、根津の本家から鍵を借りて搬入してもらいました。

なるべく早くお礼に上がらなければと思いましたが、お互いの都合が合わずまた予定した日に飯田地方に大雨警報が出たり、お盆休みの大渋滞があったりして、延び延びになり、八月十九日によつとお宅にお邪魔しお礼を申し上げますことができました。

ちなみに高森町はあのころとした市田柿の発祥の地です。

大きなお宅の通されたお座敷は、開け放たれており天竜川から吹き上げる風が気持ちよく、

猛暑のエアコン依存の関東とは全く別天地でした。その昔、帰省するたびに母（奇しくも明雅先生七回忌の正式俳諧の声明を聞きながら祖父と同じ九十四歳で亡くなりました）が、「この風を土産にうちまで持つて帰れば」と言っていたことを懐かしく思い出しました。

屏風と手紙を発見してから、家族総動員で元の学校、書道やお花の先生、郷土館、飯田の図書館などに問い合わせを重ねた末に、「蘆丈」であることが分かり、それから猫蓑を見つけることができ、連絡してくださったとの苦労話を伺い、その誠意と熱意に本心に心から感謝します、とお礼を申し上げました。

ご大家らしく、床の間には菩提寺の和尚さん揮毫の掛軸が掛けられていました。天袋にはたくさんの軸や書などがぎつり詰まっているとのこと。縁先のお庭には今は水を流してないとおっしゃっていましたが、立派な大岩をいくつも並べた池がありました。

数多の遺品の中から蘆丈の資料を見つけ出していたいただいたことに再度頭を下げました。

本件については祖父の古い交友関係、記念誌にある名簿など可能な限り探してみました。高森町の下村さんのお名前を見つけたことはできませんでした。伊那で連句の活動をしていた芋庵先代・芙紗が存命なら聞けたのかもしれないけれど、どんな経緯経路でお手元に残ったかは全くわからないとお伝えしました。

お茶と本場のリンゴをご馳走になりながら連句についていろいろお話をし、蘆丈が載っている『長野県百科辞典』と『長野県歴史人物大事

典』を紹介し、お礼に『芦丈翁聞書』と『踏青余韻』を差し上げました。

そして採れたての赤と黄色のパプリカをお土産に戴きお暇しました。帰宅後、お礼の言葉に添えて秋の三つ物をメールで送りました。

前庭の枯山水に盆の月 忠史

お座敷抜ける爽やかな風 同

土産にと秋の野菜を頂いて 同

「昨日の景色が目浮かびます」と下村さんからお返事をいただきました。

頂いた屏風ですが、無粋な拙宅に置くよりはやはり芋庵に立てて置くのが適当かと、今は庵に保管しております。

掛軸といえは、十数年前、全く存じ上げない方から都心連句会に照会したとのこと、軸に立派な桐の箱をあつらえ送って頂いたものがあります。

人不学即老衰 九十三

これは、以前同人会か総会の折に披露しましたが、最近の会員はご覧になっていないと思います（晩年に近い爺さんの言葉としてはなんと含蓄のある言葉か）。

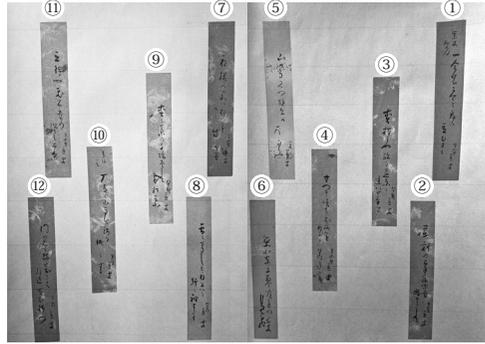
屏風はご披露できませんが、その軸は機会を見て再披露を考えています。

*速報記事は、『猫蓑通信』第128号に掲載しました。お手元のない方は猫蓑会HPで読めます。

（編集人付記）

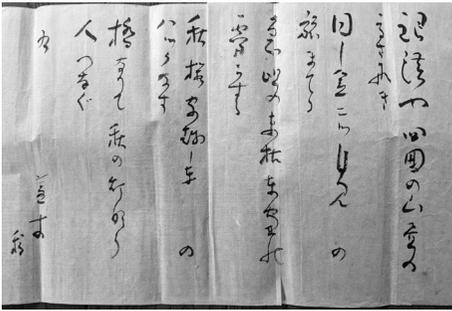
根津蘆丈新出資料紹介

短冊を十二枚張り交ぜた屏風



- ① 柴又所かん 一合袋二合と鬼の豆ひさく(ぐ) 八十八叟 蘆丈
- ② 薪割の上手路味噌好きにして 八十一 蘆丈
- ③ 松植うや線で芝原に這はせ置き 八十翁 蘆丈
- ④ さつき咲て露路にそぬるゝ日の多き 七十九叟 蘆丈
- ⑤ 山の方見つ焼腹の灰白み 八十九蘆丈
- ⑥ 柴小家に蓼喰とも月見かな 芦丈
- ⑦ 夜桜の果ハ灯のミと成にけり 七十九叟 芦丈
- ⑧ 雪になりしと夜まはり軒に袖はたく 八十六蘆丈
- ⑨ 松に藁の手際尽して敷松葉 八十叟 芦丈
- ⑩ 寺泊にて 雁遠く小雨は海を眠らす 八十一叟 蘆丈
- ⑪ 立待や庭石昼温みあり 七十九叟 蘆丈
- ⑫ 門の石に載せおきて注連貫ひ松 八十齡 蘆丈

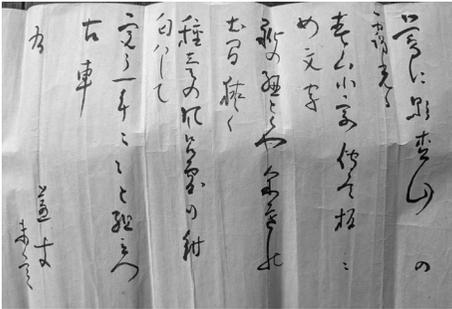
句稿A



銀漢や四圍の山屋の
高きなき
同じ(じ)笠二ツ月見の
旅まくら
急岨の末枯東窓の
霧(霧)こする
秋桜寄越し車の
ハツクなす
橋なりて秋の灯明う
人つなぐ

蘆丈
右 翁

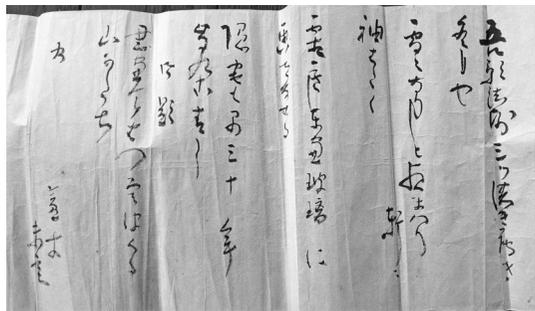
句稿B



鶯に朝奈山の
靄光る
春山小字伝言板二
女文字
靴の紐とくや余寒の
土間狭く
種壺の風呂敷の紺
匂ハして
最う一年〃〃(二年)と
組立つ
古車

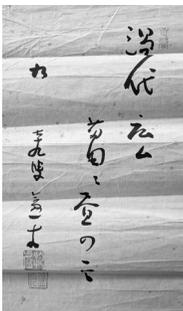
蘆丈
右 未定

句稿C



吾影法師三ツ濃き薄き
冬月や
雪になりしと夜まはり軒二
袖はたく
霜寒し東窓玻璃に
画をなせる
隠宅も早三十年
齒朶青し
御題
書窓にはつ空つくる
山かたち

句稿D



温代(ぬるきしろ) 広む
苗田に昼の雪

蘆丈
右 七十九 叟

ながさきピース文化祭2025
連句の祭典会員の入賞作品 四巻

国民文化祭実行委員会会長賞

半歌仙「ゆゆゆ」 瀧村小奈生 捌

光ゆゆ風もゆゆゆの猫柳 小奈生
くすぐたくて笑ふ山々 ましろ
トラックの荷ほどきの声うららかに ユリ
地図を片手に歩く路地裏 生
つくばひに浮かんた月を掬ひあげ 生
将棋の駒の冷ゆる盤上 ユ
境内にサーカスも立つ秋祭 生
ポップコーンの恋は戯れ ユ
君と観る映画終はらなけりやいいな ま
仏蘭西刺繍糸の絡まり 生
顔こする猫みて明日は雨模様 生
億椽ぐのが弟の夢 ま
天守閣見上げる席で飲む麦酒 ユ
かなぶん月に体当たりして 生
残響のやうにボレロのどこからか ユ
籠いつばいに焼き立てのパン ま
沿線のあちらこちらの花便り ユ
またねと言つて暮れてゆく春 執筆

連衆 清水ましろ 金子ユリ

令和七年三月十一日 起首 文音
令和七年四月 五日 満尾

五島市長賞
半歌仙「彼岸西風」 高塚 霞 捌

吉き報せのせて届くや彼岸西風 霞
若紫の咲き匂ふ頃 香織
磯遊び子らの歓声逸るらん 魚彦
窓辺に飾る写真あれこれ 純子
月光が差し込んである床の艶 由泉
鳥が競つて菜萸をつひばむ 美々丸
地芝居の憎々しげな恋敵 織泉
メイク落とせば素顔幼く 泉
お出かけはいつもどこでも手をつなぎ 織
八合目から岩場だらけで 同
留学で才能発揮ノーベル賞 純
オーダーメイドのスーツ着こなす 丸
麻暖簾分けて座敷に通される 彦
庭に蛸を放つ夕月 織
神宮の宝物殿の日本刀 同
網代文箱に時間閉じ込め 彦
花求め旅に結べる夢いくつ 泉
銀輪を踏むのどらかな道 純

連衆 平林香織 御園名彦 近藤純子

山田由泉 石浜美々丸

令和七年三月十五日 首尾
於・戸塚地域
センター



五島市福江島の空海記念碑。遣唐使船最後の寄港地三井楽港で空海が残した言葉「辞本涯(日本の最果ての地を去る)」鈴木千恵子会長撮影

ジュニアの部に入賞された坊津クラフト少年団のみなさん (次ページ参照)



田中緋茉莉さん

田中葵唯くん



上林宗平くん

上林知世さん



大郷麻里士くん

坂本嘉鉄くん

大郷永里士くん

ジュニアの部 (三つ物)

長崎県教育長賞

「噴水」

五郎丸照子

捌

噴水の水玉キラキラ青空に

坂本嘉鉄

濡れた白靴玄関の外

永瀨仁乃哉

夕飯はキーマカレーとフォカッチャだ

嘉鉄

五島市長賞

「サンタ」

五郎丸照子

捌

まんまるの月にてられ飛ぶサンタ

上林宗平

ことしのぼくはがんばったかな

田中葵唯

そよ風が大地に吹いてつくしんぼ

葵唯

【留書】

坊津クラフト少年団

五郎丸照子

私の住んでいます鹿児島県南さつま市は人口三万、鹿児島県薩摩半島の西南端で東シナ海に面し、リアス式海岸や吹上砂丘など変化に富んだ海岸線を持っています。野間岳や金峰山などの山々があり自然に恵まれた地です。野間半島にそびえる野間岳は古事記や日本書紀の神話に登場し重要な場所とされています。

また坊津は遣唐使船の寄港地で「日本三津」の一つとして大陸との重要な交易拠点でした。

奈良時代には、鑑真が失明しながらも六度目の渡航で日本上陸した地、室町時代にフランシスコ・ザビエルが上陸した地でもあります。江戸時代には薩摩藩による密貿易港として栄え、幕末の日本近代化を支えた藩の資金源でした。豪商の屋敷は「密貿易屋敷」として知られ今でもその名残を見ることが出来ます。美しい海岸線は国指定名勝に選ばれており、双剣石は江戸時代の浮世絵師歌川(安藤)広重の「六十余州名所図会」の「薩摩坊ノ浦 双剣石」に描かれており特に有名です。

さてこの地の南さつま市立坊津学園(小中一貫校)で学ぶ坊津クラフト少年団の子供たちと学校の長期休みに連句・俳句と一緒に作る機会がありました。坊津クラフト少年団は美しい海と豊かな自然が自慢の坊津町で、自分の住む町が楽しい場所になるようにと、子供が主体となって体験活動を行っています。今までに連句の三つ物、写真俳句、機織り、海遊び、山登りなどのイベントを年に五回ほど行ってきました。今回は南さつま連句会のメンバーのお孫さんも加わり冬休みと「ゴールデンウィーク」に、長崎国文祭に向けてジュニア連句の応募作品三つ物に挑戦しました。お互いにあれこれ言いながら、文字数を指で数えたり、和気あいあいおしゃべりをしたりしながら、楽しく巻きました。その作品の内、六巻応募しましたが二巻の入賞と四巻の入選を頂いて皆で喜びました。頂いた賞状、作品集の表記に名前や学校名を入れる工夫があれば子供たちももっと喜びを実感できた

のではないかと思いました。記念としてここに、入賞作品と入選作品のタイトルと連衆名、小学校名と学年を書かせていただきます。

長崎県教育長賞「噴水」の巻

坂本 嘉鉄・南さつま市立坊津学園五年

永瀨仁乃哉・練馬区立田柄小学校五年

五島市長賞「サンタ」の巻

上林 宗平・鹿児島市立西陵小学校二年

田中 葵唯・鹿児島市立郡元小学校五年

入選「椛柑」の巻

大郷麻里士・南さつま市立坊津学園九年

大郷永里士・南さつま市立坊津学園六年

坂本 嘉鉄・南さつま市立坊津学園五年

入選「クリスマス」の巻

上林 知世・鹿児島市立西陵小学校五年

田中緋茉莉・鹿児島市立郡元中学校三年

入選「聖樹」の巻

大郷永里士・南さつま市立坊津学園六年

坂本 嘉鉄・南さつま市立坊津学園五年

大郷麻里士・南さつま市立坊津学園九年

入選「茶畑」の巻

坂本 嘉鉄・南さつま市立坊津学園五年

永瀨仁乃哉・練馬区立田柄小学校五年



坊津クラフト少年団の活動のようす

●既往の行事

●令和七年十月十九日(日)、江東区芭蕉記念館にて第七十三回例会(芭蕉忌・明雅忌)を開催。正式俳諧興行の後、源心興行。当日作品は4〜6ページに掲載。

●令和八年一月二十五日(日)、江東区芭蕉記念館にて、第七十四回例会(初懐紙)を開催。歌仙興行。当日作品は次号に掲載予定。

●今後の行事予定

●令和八年四月下旬に、亀戸天神社にて、第七十五回例会(藤まつり例会)を開催予定。神楽殿にて正式俳諧興行(一般公開)後、二十韻興行。

●同六月二十八日(日)に、同人会総会を開催予定。歌仙興行。

●猫蓑会リモート連句会

●第三十回・第三十一回を、十二月十三日(土)・二月十一日(水・建国記念の日)に開催。作品を猫蓑会HPに掲載。

●第三十二回を、四月十一日(土)に開催予定。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます。

●水落好未知様 令和七年十二月 五千円

●*基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金 普通預金 3376045

●新入会員

●山本坊太 (東京都) 令和七年十二月入会
●坪井まちこ (愛知県) 令和七年十二月入会
●板垣梅星 (神奈川県) 令和七年十二月入会

●『新装版連句入門』発売中

●『新装版連句入門 芭蕉の俳諧に即して』を多くの方にご購入いただきました。ありがとうございます。

●引き続き、会員特別割引価格にて販売します。税込み価格一六五〇円のところ、送料込み一二〇〇円でお分けします。購入希望者は平

林香織までメールにてお申込みの上、左記のゆうちょ銀行に、一冊につき一二〇〇円(本体割引価格+送料)をお振込みください。

【申込み先】 平林 香織 khira884@gmail.com
【振込み先】 ゆうちょ銀行

口座番号 00140-4-791856
加入者名 猫蓑会

●前号の訂正とお詫び

左記のとおり訂正があります。関係諸氏にご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

●7ページ掲載の歌仙「鬚涼し」のナオ4句目 誤「ムーミン谷はいつも平和さ」
正「ムーミン谷の穏やかな日々」

●猫蓑会映像アーカイブ

●東明雅先生がお持ちだった正式俳諧や立机式のビデオのDVDを武井雅子さんから猫蓑会にご寄贈いただきました。主な映像は左のとおりです(タイトル表示はリストのまま)。

平成三年十二月八日 立机式
平成五年九月二十二日 熱田神宮正式俳諧
平成五年十月二十日 第十四回正式俳諧
平成七年五月十七日 立机式 今年竹
平成八年十一月十一日 熱田神宮正式俳諧
平成十一年二月十七日 立机式 松五本
平成十一年五月十五日 熱田神宮正式俳諧
平成十四年四月二十五日 藤祭正式俳諧
平成十四年十月十六日 第二十三回正式俳諧
平成十五年四月二十五日 藤祭正式俳諧
●正式俳諧や立机式の伝統を後世に伝えていくための貴重なアーカイブとして、有効な活用方法を理事会で検討中です。活用方法に関するアイデアを理事会までお寄せいただければ幸いです。

定期刊行 『猫蓑通信』第百二十九号

令和八年二月二十八日発行

発行人 猫蓑会 鈴木千恵子
事務局 佐々木有子

〒161・0033

東京都新宿区下落合4-9-34・313

編集人

編集委員

平林香織
岩崎あき子・奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・武井雅子・田中秀夫

(五十音順)

印刷所

関東図書株式会社